

## 漱石文学における「縹緲」 ——『虞美人草』の「縹緲のあなた」について——

(要旨)

胡 穎 芝\*

夏目漱石の小説『虞美人草』は、二人の友人同士の甲野さんと宗近が比叡山を登る場面で始まり、「山を下りて近江の野に入れば宗近君の世界である。高い、暗い、日のあたらずぬ所から、うらかな春の世を、寄り付けぬ遠くに眺めて居るのが甲野さんの世界である」というところで第一章が終わるが、「宗近君の世界」と「甲野さんの世界」は一体どういう世界だろうか。

「宗近君の世界」は、登山している甲野と宗近にとって、それは二人の行き路に沿って帰るところである。それに対して、「甲野さんの世界」は甲野さんが「うらかな春の世を、寄り付けぬ遠くに眺めている」世界であり、「夢のよう」な「薄紫の遠山を縹緲のあなた」、「ずっと向うの紫色の岸の方」や「縹緲としている」島で構成される世界である。もし「宗近君の世界」は現実世界であれば、「甲野さんの世界」は現実世界と正反対の場所であり、すなわち非現実世界であると考えられる。この「非現実世界」を明らかにするため、注目すべきなのはその描写に見られるキーワード「縹緲」と「紫」である。しかし、「紫」はこの引用部分だけではなく、藤尾の描写にも、『虞美人草』全篇にかけて、よく出てくる言葉なので、『虞美人草』なる小説のキーワードだと言っても過言ではないと思われる。

「縹緲」はもともと「高く遠くほんのりかすかであるさま」を意味するが、西晋・木華『海賦』（『文選』巻12）から「神仙説」に結びつき、唐代においてこれを意識して作品で使っている文人も少なくない。特に、白居易の「長恨歌」によって、日本の知識人もこの使い方を意識したのではない

かと考えられる。さらに、夏目漱石の小説や漢詩にも、この「神仙説」に結びついた「縹緲」の使い方が見られるので、彼もそれを意識しながら作品に使っていると思われる。

実際、『虞美人草』の現実世界は、俗界の欲望に支配される人たちがところどころに見られる世界である。もし漱石は、「縹緲のあなた」の「縹緲」が、「神仙説」に結びついた「縹緲」の意味を捉え、さらにこの世界は宗近の「現実世界」とは違う世界であれば、甲野さんの憧れる世界は仙境のような東洋的な理想郷であるとも考えられる。また、『虞美人草』を発表する一年前に世に出された『草枕』も神仙小説である可能性はすでに指摘されているので、両小説を合わせて考えれば、『虞美人草』における甲野さんの憧れる世界は、明らかに東洋的な「縹緲」たる理想郷＝仙境であると考えられる。

ところが、漱石の描いた仙境はただ仙境のような世界であり、「実体がない」という特色が見えると考えられる。当時の世界の中心であるイギリスに留学した漱石は、世界情勢をよく把握しているうえ、イギリスで近代化が人間の精神を衰弱させていく過程も目撃した。このような矛盾の中で、自分や日本の国民をその悪影響から解放するため、仙境なる理想郷を解決策として提示しようとするが、近代化に進んでいる明治日本にとって、仙境はただ無意味な空想世界であることをよく承知していた。したがって、漱石の描いた仙境は結局「実体がない」ままで残されることになり、明治の知識人が近代化に進む現実世界への不満や不安に対する解決策を見出せない矛盾を象徴している。

\*お茶の水女子大学大学院院生